

2. 哺乳類

【選定・評価方法の概要】

検討対象とした範囲は、東京都島しょ部において、現在生息が確認されているか、明治時代頃まで生息の記録がある在来の哺乳類のうち、陸域を生活の場とするもの、及びアザラシ類など陸に上がる可能性があるものとし、海域だけにみられるイルカ・クジラ類は対象に含めなかった。

絶滅のおそれの評価は、基本的に定量的要件を用い、CR（絶滅危惧 IA 類）と EN（絶滅危惧 IB 類）も区別した。

検討対象種には、伊豆諸島については、前回（1998 年版）は含まれていなかったユビナガコウモリとニホンアシカの 2 種を加える一方、前回はアカネズミとは別の種とされていたミヤケアカネズミ（三宅島個体群）を、亜種オオシマアカネズミ（大島、新島個体群）とともに、アカネズミ 1 種にまとめ、合計 7 種とした。この取り扱いは、いずれの亜種に属するか不明な個体群（式根島、神津島）があることや、遺伝的・形態的に新島個体群が大島個体群より三宅島個体群に近いと考えられること（Kageyama, M., M. Motokawa and T. Hikida, 2009. Geographic variation in morphological traits of the large Japanese field mouse, *Apodemus speciosus* (Rodentia, Muridae), from the Izu island group, Japan. Zool. Sci. 26: 266-276) などから、既知の亜種を評価単位とするのは適切でないと考えたことによる。小笠原諸島については、前回のオガサワラオオコウモリにオガサワラアブラコウモリを加えた 2 種を検討対象とした。

【選定・評価結果の概要】

<伊豆諸島>

評価の結果、ニホンアシカ 1 種を EX（絶滅）、ユビナガコウモリ 1 種を DD（情報不足）とした。ニホンアシカは、1908 年（明治 41 年）まで神津島に生息していたという記録がある（環境庁, 1991. 日本の絶滅のおそれのある野生生物—レッドデータブック—脊椎動物編. 日本野生生物研究センター）。ユビナガコウモリは、これまで伊豆諸島で記録がなかったが、2009 年 9 月から 11 月に大島の行者海岸トンネル内で複数個体が確認されており（成瀬裕昭, 2010. 私信）、島外からたまたま飛来したとも考えられるが、少数が定着している可能性もあることから DD と評価した。以上の 2 種のほかに種全体としていずれかの絶滅危惧カテゴリーに該当する種はなかったが、アカネズミの三宅島個体群は、短期間の現地調査でも生息が確認できるなど、当面絶滅のおそれは高くないと考えられるものの、外来のニホンイタチによる捕食と 2000 年の噴火の影響を大きく受けている可能性があるため、NT 相当の地域個体群（LP）と評価した。キクガシラコウモリとコキクガシラコウモリの 2 種は、現地調査により利用洞穴で相当数が確認されるなど、伊豆諸島全体としては絶滅のおそれは低いと考えられる。しかし、伊豆大島と御蔵島においては、コキクガシラコウモリの利用が知られていた洞穴（防空壕）が改変を受けており、現地調査では生息が確認できな

った。洞穴性コウモリ類は、このように、採餌環境である森林が保全されていても、人為によって生息拠点が失われることの影響が大きく、保護上の配慮が必要と考えられることから、2種ともに留意種とした。ニホンジネズミとイタチは、生息状況に懸念すべき点は知られておらず、いずれのカテゴリーにも該当しないと評価した。

今後の課題として、とくにコウモリ類による洞穴（人工・天然を問わず）の利用状況について調査を行い、重要な洞穴については周辺環境を含めて改変を受けないような配慮をすることが望ましい。

<小笠原諸島>

検討対象となった2種のうち、オガサワラオオコウモリはEN、オガサワラアブラコウモリはEXと評価した。ただし、オガサワラアブラコウモリは、19世紀末に母島で採集されたとされる模式標本1個体が知られるのみで、本当にここで繁殖していたのか疑問視する意見がある（前田喜四雄，2001．日本コウモリ研究誌．東京大学出版会）。オガサワラオオコウモリは、環境省版レッドリストではCRとされているが、個体数はきわめて少ない（諸島全域で合計200～300頭）ものの、近年は安定もしくは漸増傾向にある（鈴木創・稲葉慎，2010．空飛ぶ森の守り神と島々の未来－オガサワラオオコウモリの生態と保全策．遺伝，64（4）：61-67.）ことからENと評価した。

小笠原諸島の固有種であるオガサワラオオコウモリは世界的にみても重要な保全対象である。現在、オガサワラオオコウモリの脅威となっている要因として、生息記録がある島のうち、南硫黄島以外の島（父島、母島、北硫黄島、硫黄島）において、外来種であるイエネコの捕食、ネズミ類による餌競合と植生への影響、さらに主要な生息地である父島では、ねぐら域の開発・攪乱、食害防止ネットへの絡まり事故などがあげられている（鈴木・稲葉，2010）。これらの問題解決のため、早急かつ適切な対策が望まれる。また、復帰当時（1968年）、数百頭規模の生息が知られていた母島では、生息環境は維持されているにもかかわらず、1970年代後半以降、数頭程度の情報があるだけで現在まで回復が認められない。この原因を究明し、安定した個体群の確立を図ることも重要な課題である。

（石井 信夫）

哺乳類(島しょ部)

【記号凡例】

[EX]絶滅 [EW]野生絶滅 [CR]絶滅危惧ⅠA類 [EN]絶滅危惧ⅠB類 [VU]絶滅危惧Ⅱ類
[NT]準絶滅危惧 [DD]情報不足 [LP]絶滅のおそれのある地域個体群 [*]留意種

■伊豆諸島

和名	学名	東京都ランク (伊豆諸島)	環境省 ランク	備考
コウモリ目(翼手目)	CHIROPTERA			
キクガシラコウモリ科	Rhinolophidae			
キクガシラコウモリ	<i>Rhinolophus ferrumequinum</i>	*1		
コキクガシラコウモリ	<i>Rhinolophus cornutus</i>	*2		
ヒナコウモリ科	Vespertilionidae			
ユビナガコウモリ	<i>Miniopterus fuliginosus</i>	DD		
ネコ目(食肉目)	CARNIVORA			
アシカ科	Otariidae			
ニホンアシカ	<i>Zalophus japonicus</i>	EX	CR	
ネズミ目(齧歯目)	RODENTIA			
ネズミ科	Muridae			
アカネズミ(三宅島個体群)	<i>Apodemus speciosus</i>	LP		1

和名、学名、配列は、阿部永(監), 2008. 日本の哺乳類 改訂2版. 東海大学出版会. に準拠した。

【備考】

1: 三宅島では放獣されたイタチによる捕食の影響、および噴火による森林植生の衰退の影響を受けている可能性があり、NTに相当すると評価した。

【留意種とした理由】

	和名	留意種とした理由
*1	キクガシラコウモリ	個体数、生息条件について現状で大きな問題は知られていないが、ねぐらとなっている洞穴がふさがれたり破壊されれば地域個体群に大きな影響が及ぶ可能性があるため、留意が必要である。
*2	コキクガシラコウモリ	伊豆諸島全体でみると絶滅のおそれは低いですが、大島と御蔵島において、利用が知られていた防空壕が改変され、その場所での生息が確認されなくなった事例がある。このように、多くの個体が集中する洞穴がふさがれたり破壊されれば地域個体群に大きな影響が及ぶ可能性があるため、留意種とした。

■小笠原諸島

和名	学名	東京都ランク (小笠原諸島)	環境省 ランク	備考
コウモリ目(翼手目)	CHIROPTERA			
オオコウモリ科	Pteropodidae			
オガサワラオオコウモリ	<i>Pteropus pselaphon</i>	EN	CR	
ヒナコウモリ科	Vespertilionidae			
オガサワラアブラコウモリ	<i>Pipistrellus sturdeeii</i>	EX	EX	

和名、学名、配列は、阿部永(監), 2008. 日本の哺乳類 改訂2版. 東海大学出版会. に準拠した。